

氏名(本籍)	鈴木祐丞(神奈川県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第6358号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	キェルケゴールの実存的思想 - 1848年の宗教的体験と『死にいたる病』の分析を通じた考察 -
主査	筑波大学教授 Ph.D. 鬼界彰夫
副査	筑波大学教授 博士(文学) 桑原直己
副査	筑波大学准教授 博士(文学) 橋本康二
副査	関西学院大学名誉教授 文学博士 橋本淳

### 論文の内容の要旨

本論文はデンマークの哲学者キェルケゴールの思想を、彼自身の生と不可分な関係にあるものとして捉えることによりその本質を明らかにしようとするものであり、それゆえ彼の思想を言葉本来の意味における実存思想として理解しようという試みでもある。本論はこのことを、従来より諸研究者によりキェルケゴールが重要な思想的体験をしたと言われてきた1848年の体験を決定的な宗教体験と捉え、それがいかなる宗教的・思想的体験であり、その前後において彼の生、思想、信仰観がどのように変化したのかを明らかにすることを通じて実現しようとする。

先ず序説において上記のような問題設定と、その解明を行うに当たってキェルケゴールの伝記的事実に立脚した生の実相の探求と、著作において表現された哲学的・宗教的思想の探求を不可分なものとして同時に遂行するという研究方法がいくつかの先行研究・関連研究を範として提示される。

続く第一部では1848年までのキェルケゴールの生と思想が解明されるが、その際鍵となるのが「反省の後の直接性」あるいは「反復」という概念である。本論によればこの時期のキェルケゴールの生は、彼の父による幼少期からの厳格な宗教教育と複雑な家族の事情・経験のために、「直接性」の欠如として特徴付けられるという。すなわち幼少期からの厳格なキリスト教的宗教教育の結果として原罪意識とともに成長したキェルケゴールには通常の子供のように無邪気にこの世の生を享受し楽しむという経験がなく、自己の罪を意識するという「反省」の状態に彼が初めから常に置かれていたことを本論は明らかにする。この時期のキェルケゴールは又、こうした自己の罪に対する神の許しの可能性を信じられない状態にあり、そうした自己の弱さを他から隠蔽しようとする内向的な生の局面としての「閉じこもり」という状態にあったことが示される。そしてこの時期の彼の思想は、原罪に対する神の許しの可能性を確信することによりこうした「閉じこもり」から脱し、そのことによりこの世の生を子供のごとく享受できる状態としての「反省の後の直接性」という概念あるいは生の理想的状態を、目指すべき「信仰」の内実として確立することにその核心があると本論は主張する。そして『あれか・これか』、『おそれとおののき』といったこの時期の著作が、「反省の後の直接性」としての信仰の内実を明らかにするとともに、どのような階梯を経てそこに人は至ればよいのかを示すものであることが明らかにされる。

続く第二部が本論の核心となるが、そこでは以上のような背景の下で、1848年の宗教的体験によって彼の生と思想がどのような変遷を経て、最終的にはどのような状態へとたどり着いたのかが、この時期の日記と、この時期の著作『死にいたる病』の詳細な分析を通じて明らかにされる。この時期の日記は先ず、彼が「閉じこもり」から脱し、神の許しの可能性の確信を通じた「反省の後の直接性」という信仰・信仰的生が自分に訪れる可能性を喜びとともに示唆する。しかしその後の日記は、彼が自分の生として「反省の後の直接性」という信仰には甘んじられないと感じ始めることを示す。すなわち人にとっては「反省の後の直接性」よりはるかに厳しい「キリストとの同時性」という理想こそが自分の生を導くべきものであり、それに沿って、あるいはそれを目指して生きることこそが自分にふさわしい信仰であると彼は感じ始める。「キリストとの同時性」とはキリストとの同時性を実際に生きた使徒たちのように生き、彼らが被った迫害も自らのものとして受け入れるような生を意味する。そして最終的に彼は自分が使徒として生きることが出来ないことを自覚する。しかし同時にそうした生を理想としてかけ、それに達しないものとしてへりくだりながら生きる生を自らのものとするを「自己への無限の関心」としてとらえ、この「自己への無限の関心」こそが自らが生きるべき信仰であるという思想へと、そしてこの思想に従って生きるという生の状態へとケルケゴールがたどり着いたことを本論は明らかにしている。加えて、こうした観点から自己のこれまでの生を振り返りケルケゴールは、それが「自己への無限の関心」という理想に導かれた過程であったと自覚し、そこに神の導きを見出したことも本論は明らかにしている。

続く第三部は、1848年以降の晩年の生においてケルケゴールが行ったいわゆる教会闘争が、1848年に彼がたどり着いた信仰・信仰的生の実践であったことが明らかにされる。すなわち現実のキリスト教会であるデンマーク国教会に対して、それが「キリストとの同時性」というキリスト教徒が本来抱くべき理想的信仰観を捨てていることを『瞬間』などの小冊子を通じて批判し続け、そうした活動のうちに彼はその生を終えたことを本論は明らかにしている。

## 審査の結果の要旨

ケルケゴールはしばしば実存主義的思想家と言われるが、実存的思想とはその人の思想と生が不可分であるような人についてのみ当てはまる形容である。それゆえケルケゴールの思想を実存的思想として理解するためには彼の現実の生と彼が著作の中で述べたことの内的関係に着目し、それを主題化しなければならない。しかしこれまでのケルケゴール研究の主流はもっぱら彼の著作の内容を対象とするものであり、世界のケルケゴール研究においても、彼の生と思想の内的関係自身を対象とする研究はようやく近年において大きく注目されるようになったに過ぎない。鈴木氏の本研究は、その生と思想の内的関係に注目するという、実存的思想家としてのケルケゴール研究が本来用いるべき、しかしこれまで決して多く用いられなかった手法を用いた本格的な研究として、そしてその点で世界の最新のケルケゴール研究の動向に沿った先進的なものとして大きな意義を持っている。加えてその具体的遂行において本研究はケルケゴールの著作、手稿、日記、を最新の編集に基づいたデンマーク語原典の詳細で正確な分析に基づいており、実証的かつ哲学的なケルケゴール研究としてきわめて高い価値を持つものであると評価される。さらに具体的内容に言及すれば、本研究は、1848年の宗教的体験によってケルケゴールは「反省の後の直接性」という信仰の境地に到達したという従来の定説に対して、実際に彼が到達したのは「自己への無限の関心」という別の信仰の境地であったという解釈を日記資料の詳細な分析によって意欲的に試みており、その点において画期的なケルケゴール研究であると判断される。一方、「自己への無限の関心」という信仰の境地が1848年以降のケルケゴールの生活の中で具体的にどのような形で実現されたかについては十分に示されておらず、今後の研究における更なる解明が望まれる。

平成 24 年 7 月 20 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。